

農業と科学

1981
3

G H I S S O - A S A H I F E R T I L I Z E R C O . , L T D .

転換畑用大豆の 新品種について(完)

農林水産省・農林水産技術会議

平 岩 進

先号においては、転換畑用大豆の品種として、キタコマチ、タンレイ、ナカセンナリについて説明したが、引き続き、ミヤギオオジロ、ユウヒメ、アキシロメ、キタホマレ、タマホマレ、フクユタカについて述べる。

4) ミヤギオオジロ(ミヤギシロメ×ほうじやく)

昭和53年長野県農総試中信地方試験場育成

主茎長は「ミヤギシロメ」より5cm以上長い長茎種で、子実はやや楕円、粒色は黄白色、へそ色は黄色で、障害粒はごく少なく粒揃いも良く、きわめて良質である。立枯性病害は「ミヤギシロメ」より極めて強く、紫斑病も少ない。

抗性はなく、ダイズシストセンチュウに対しても、抵抗因子を持っていない。収量性は「ユウヅル」と同程度であるが、熟期が早いため、比較的安定している。

適地としては北海道の空知中部以南、石狩、後志、胆振、日高およびこれに類似した地帯である。

この品種は極大粒種であるため、中～小粒種に比して発芽にやや多くの日数を要し、発芽率が低下することがあるので、必ず種子消毒を行うこと。また、茎長が短いので、やや密植にすることによって多収が得られるので、800株/a以上の株数を確保する必要がある。

6) アキシロメ(アキヨシ×鳩殺12)

昭和54年九州農業試験場育成

主茎長は「アキヨシ」より15cm短い短茎種で、子実は球形に近く、粒色は黄白、へそ色は黄色で、粒揃いが良く、種皮の亀裂その他の障害も少なく、品質は非常に良い。熟期は、「アキヨシ」より10日前後早い早生種に属する。ダイズウイルス病に対しては中位で、褐斑粒の発生は少なく、べト病には比較的強く、紫斑病の発生も少

表-5 ミヤギオオジロの育成地における試験成績

品 種 名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	茎 長 (cm)	主 茎 節 数	分 枝 数	生育中の障害				a 当り収量		百 粒 重 g	虫害粒	品 質
						倒 伏	ウ ル イ ス	変 化	立 枯 れ	子実重 kg	同 比 左 率			
ミヤギオオジロ	8.4	10.17	71	17.0	4.8	微	微	微	微	15.1	105	30.7	無	上中
ミヤギシロメ	8.2	10.12	65	16.6	6.1	微	無	無	中	13.1	100	35.4	微	上下
タマヒカリ	8.4	10.15	76	18.2	5.3	少	微	微	微	15.7	115	28.7	微	上下

昭和48～50年の平均値

成熟期は「ミヤギシロメ」より5日程度遅い中晩生種で晩播適応性も高く、強稈性の極大粒良質種である。適地としては宮城県「ミヤギシロメ」栽培地帯で、とくに立枯性病害発生地に適す。また、極大粒で強稈のため伸長し大粒になりやすい肥沃地及び多肥栽培に向く。

5) ユウヒメ(奥原1号×木造在来)

昭和54年北海道立中央農業試験場育成

主茎長は「ユウヅル」より15cm短い短茎種で、子実は豊満な球形で種皮色はやや黄色、へそ色は黄色である。子実の100粒重は「ユウヅル」よりやや小さいが、約40gで極大に属し、粒揃いも良く、亀裂粒、しわ粒も少なく、外見の品質は良好である。

開花、成熟は「ユウヅル」より早く、中生種に属する。耐倒伏性は「ユウヅル」並の中程度である。ダイズわい化病に対しては、「ユウヅル」よりやや強いが、抵

抗性は「アキヨシ」より強く、子実収量は「中鉄砲」、「シロタエ」より多く、安定多収品種であり、晩播適応性も高い。

適地は中国、近畿地方の中央平坦地であり、水田転換

<3月号目次>

- § 転換畑用大豆の新品種について(完).....(1)
農林水産省・農林水産技術会議
平 岩 進
- § 乾田直播水稻に対する
LPコート of 肥効.....(3)
横山 鹿 男
- § 冷害、農業経済に大きく影響.....(6)
～55年度農業観測修正見通し～
- § りんご栽培技術の普及見込み.....(8)

表一6 ユウヒメの育成地における試験成績

主莖長は「中鉄砲」,「シロタエ」より短かく、倒伏、

昭和50~53年の平均値

品 種 名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	主莖長 (cm)	主莖 節数	稔実 莢数 (莢/株)	1 莢内 粒 数	倒伏 程度	a 当り収量(kg)		百粒重 (g)	しわ粒	亀裂粒	品 質
								子実重	対 比				
ユウヒメ	7.23	10.1	48	12.1	53.5	1.91	0.9	34.1	105%	41.0	無	極微	中上
ユウヅル	7.29	10.13	61	14.7	56.4	1.78	1.5	32.4	100	41.8	極微	微	上下

表一7 アキシロメの育成地における試験成績

蔓化は少ない。子実は球形で、種皮色、ヘソ色とも黄色

昭和49~53年の平均値

品 種 名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	莖 長 (cm)	主 莖 節 数	分 枝 数	生育中の障害				a 当り収量		百 粒 重 (g)	虫 害 粒 %	品 質
						倒 伏	ウ イ ル ス	ベ ト 病	サ ビ 病	子 実 重	同 左 比 率			
アキシロメ	8.18	10.24	39	11.8	3.5	無	無	微	中	20.8kg	78%	25.8g	18.6	上
アキヨシ	8.25	11.5	54	14.2	5.0	微	無	微	微	25.8	100	22.3	14.5	中

畑においても栽培が容易である。

7) キタホマレ (十育114号×カリカチ)

昭和55年北海道十勝農業試験場育成

主莖長は「キタムスメ」より短く、子実はやや扁球形で、種皮色は黄白、ヘソ色は暗褐色である。100粒重は30g内外で、外見の品質は「キタムスメ」並である。成熟期は「キタムスメ」より3~6日遅く、中生の晩に属する。耐倒伏性、耐病虫害性は「キタムスメ」並である。耐冷性は「キタムスメ」並で強く、収量は「キタムスメ」に比べて約15%多収で、極めて高い収量性を示す。

この品種は、北海道の道央中部および道央南部地域に適すが、ダイズシストセンチュウ抵抗性をもたないので被害の恐れのある圃場での栽培は避ける必要がある。

8) タマホマレ (Lee×東山7号)

昭和55年長野県中信農業試験場育成

表一8 キタホマレの育成地における試験成績

昭和48~54年の平均値

品 種 名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	主莖長 (cm)	主莖 節数	稔実莢数 (莢/株)	倒伏 程度	耐冷 性	虫食粒数 率 (%)	a 当り収量(kg)		百粒重 (g)	品 質
									子実重	対比(%)		
キタホマレ	7.24	10.6	51	11.6	68.4	0.4	強	-	32.8	111	31.7	中上
キタムスメ	7.23	10.1	60	12.0	61.6	0.6	強	-	29.3	100	30.5	中上
北見白	7.25	10.2	54	12.7	68.8	0.3	強	-	27.6	94	25.2	中上

表一9 タマホマレの育成地における試験成績

紫斑病の発生も少ない。着莢性は良好で、多収であり、

昭和46~54年の平均値

品 種 名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	倒 伏 程 度	主 莖 長 (cm)	a 当り 子 実 量 (kg)	同 左 標 比 (%)	百 粒 重 (g)	障 害 粒 程 度			品 質
								紫 斑	褐 斑	亀 裂	
タマホマレ	8.2	10.25	微	72	24.8	113	27.2	無	微	無	上下
中鉄砲	8.5	10.22	中	86	22.0	100	32.1	無	微	微	中上
シロタエ	8.3	10.23	微	81	22.7	103	32.9	無	微	少	上下

最下着莢位置は他の品質より高い。

この品種は、福岡県を中心とした九州北部地

表一10 フクユタカの育成地における試験成績

方の平坦地および、四国の北部地方の水田転換畑によく

昭和49~54年の平均値

品 種 名	開花期 (月・日)	成熟期 (月・日)	主 莖 長 (cm)	分 枝 数 (本)	臍 色	子 実 重 (kg/a)	百 粒 重 (g)	品 質	粒 の 障 害		
									紫 斑	褐 斑	種皮の 亀裂
フクユタカ	8.24	10.30	53	4.1	淡 褐	26.3	25.9	上	無一微	無	少
アキヨシ	8.26	11.4	56	4.8	"	25.6	21.9	中	"	"	"

適す。

乾田直播水稻に対する LPコート of 肥効

横山 鹿男

岡山県の東部を流れる吉井川が、瀬戸内海に注ぐ河口から上流へ約4キロの西岸に、西大寺農業協同組合がある。当該地域は吉井川両沿川に広がる水田地帯で、稲作を中心とした農家の経営が多い。

吉井川の河口両沿岸の水田は、今から約300年前に池田藩によって干拓された水田である。海拔0メートルで、地下水位の高い、砂質土壌がそのほとんどである。用水の水源を吉井川の上流に求めており、用水路の最末端であるために、旱天の続く年には水不足等から、用水不足対策に戦前に直播栽培が導入されその歴史は古い。

古老の残した豊かな栽培体験を基礎に栽培技術が確立され、併せて農薬、農業機械の進歩によって、スジ播直播栽培による機械化一貫体系を確立し、現在では、水稻作付面積の90%まで直播栽培が達し、省力化された稲作技術として定着しているのである。

しかし、県下の代表品種アケボノの産地であるこの地

域の米づくりに、大変な危機がせまってきた。

食糧増産運動を展開してきた農政は、一転して減反政策である。米の生産過剰は国内において産地間の競争に迫られ、これ等の困難に打ち勝つためには、米の生産性を飛躍的に向上し、味の良い良質米の安定生産を図ることが要求されるようになった。

その具体策の一つに、良質米安定多収を施肥改善に求め、昭和55年度当該地区に新肥料LPコート入り複合肥料の効果に期待し展示ほを設置した。その成績をとりまとめたので、概要を紹介し、考えてみたいと思う。

展示ほの概要と成績

試験展示ほの概要と成績は第1表の通りである。大橋ほ場、串田ほ場は、チッソ成分の90%がLPコート(被覆尿素)供試肥料140日型を用いたもので、これを全量元肥として、各試験ほ場とも播種後15日目に表面に施用した。岡本ほ場では、緩効性の程度や量の異なるものを用いた施肥で、横山ほ場は最もチッソの流亡損失の多いと云われている不耕起土壌である。

結果の概要

生育は各展示区ともに順調に生育したが、岡本ほ場は入水前(6月20日)の除草剤(DCPA剤)の散布により薬害がひどく、初期の生育はおくれた。

第1表 55年度被覆尿素(LPコート)肥効試験成績(水稻, アケボノ)

○印LPコート施肥

西大寺農協

試 験 圃 場	最高	穂数	穂長	稈長	有効	わら重	もみ重	玄米重	玄米	くず米	千粒重	もみ
	莖数											
	1株(20株平均)当り本数cm				(%)	(kg/a)	(kg/a)	(kg/a)	(%)	(kg/a)	g	(%)
1. 大橋氏圃場 播種5月14日、排水不良、砂壤土 kg/10a 元 7/7 8/13 8/23												
① LPコート区 13.2 (13.2) -0 -0 -0 (B90U140)	16.2	15.4	20.3	93.0	95.0	68.01	71.40	59.70	83.6	0.48	24.0	105
② 慣行 昭402区 13.3 8.4 -1.4 -1.4 -2.1	17.4	13.0	19.5	85.3	74.7	53.46	54.90	46.20	84.2	0.12	24.6	103
2. 串田氏圃場 播種5月20日、排水良、砂壤土												
① LPコート区 8.8 (8.8) -0 -0 -0 (B90U140)	17.5	16.4	19.6	88.8	93.7	70.86	67.8	57.00	84.1	0.67	24.4	96
3. 岡本氏圃場 1) 播種5月19日、排水良、砂壤土												
① LPコート区 9.45 (8.4) -0 -1.05 -0 (B60U100)	15.0	13.5	21.2	86.7	90.0	68.10	63.00	52.50	83.3	0.47	24.4	93
② LPコート区 9.6 (7.2) -0 -(2.4) -0 (B40U70)	18.3	12.7	21.5	84.6	69.4	57.00	61.50	51.00	82.9	0.45	25.0	108
4. 岡本氏圃場 2) 播種5月18日、排水良、壤土												
① LPコート区 9.0 (9.0) -0 -0 (B80U100)	13.5	13.4	19.8	84.7	99.0	59.85	68.00	52.50	83.3	0.15	24.0	105
② LPコート追肥区 10.8 5.6 -2.8 -(2.4) (B40U70)	19.3	12.7	21.1	90.9	65.8	54.12	60.00	49.80	83.0	0.30	24.7	111
5. 横山氏圃場 播種5月18日、排水良、壤土												
① LPコート区 8.78 (7.5) -0 -1.28 (B80U100)	15.2	14.0	22.1	93.5	92.0	75.10	74.70	62.10	83.1	0.42	25.9	99

草丈について……各ほ場とも慣行施肥にくらべて、7月中旬頃までは草丈の伸長は、LPコート区がやゝ劣るが、7月下旬頃よりは慣行施肥よりLPコート区が優りこの傾向は出穂期までつづき、稈長も長い。特に止葉の葉巾の広いのが目立つ。昨年のような異状気象でも茎、葉ともに強剛に育ち、特に稈の基部は異状にかたい。各ほ場とも倒伏もない生育であった。

分けつについて……分けつの増減の消長は第1図を参照されたい。最高分けの数は慣行施肥（普通化成）が多いが、減少する量と速度も早く、各展示ほともLPコート区が有効茎歩合は高い成績である。しかし、LPコート区でも、緩効性の量が少ない岡本ほ場1の2のようなLPコート70日型40%では、硝化抑制剤入り化成（ジアン）と大差はない結果である。

大橋、串田、横山ほ場のように、施用したチッソの損失の多い土壌条件下で、全量を元肥に施用しても、初期

生育の過剰はみられず、ほ数も多く、有効茎歩合も高い結果が得られた。

収量について……第1表を参照されたい。

55年度の作況指数は岡山では87%と、昭和29年につぐ凶作である。大橋ほ場以外は慣行施肥の対照がないので数字をおみせすることができないが、隣接田の反収は480kg~500kgである。各ほ場ともLPコート展示ほの反収は、隣接田を上回る好成績である。

大橋ほ場の慣行施肥区の低収量は、ほ数減によるものであると思うが、このほ場は、常時深水に経過し、昨年のように雨の多い分けつ期間中かけ流しかん水状態から施用した肥料の損失によるためか、特に最高分けつ期から幼穂分化までの期間の、肥効持続の低くなったことによるものと考えられる。

解体調査結果について……第2表を参照されたい。調査個体は5株で、各株毎の主稈のみ調査した成績である。

節間長、穂相調査の結果では、LPコート（被覆尿素）の量や程度（各溶出タイプ）により、それぞれの差異が見られるが、各ほ場とも、LPコートの70日型40%区を除いては下位、上位節間とも伸長に大差はない。下半に対する上半の伸長比率では、いずれも穂肥施用したほ場が長い。緩効生程度つまり140日型と100日型とでは、同一ほ場内での比較をすれば456の各節間で、ほとんど差はないが、第345節間の合計伸長では、LPコート70日型40%区が短かった。

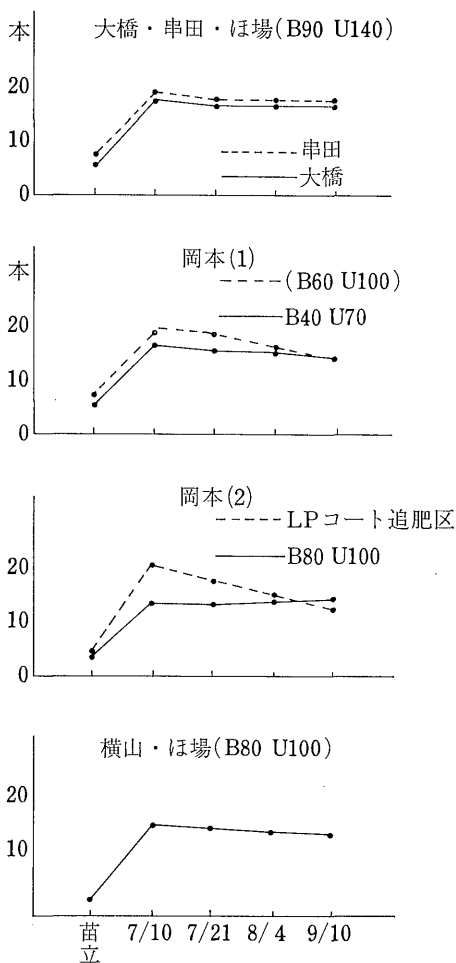
ほ相調査は第2表を参照されたい。1穂着粒数、完全粒数ともに、LPコート区が全体的に多く、LPコート複合肥料がまさっている結果である。LPコート入り複合肥料の緩効性の程度や量によって異なるが、総施用量を元肥に表面施用しても、初期に過剰生育はみられず、水稻の要求にマッチし注目される肥効を示した。特に有効茎歩合が高く、高収量省力施肥が可能であることを示している。このことは、無駄な生育をさせない、健康な稲づくりができると云うことである。

乾田直播とLPコート

乾田直播は移植栽培と異なり、初期生育約30日~40日間畑状態で生育し、入水後も、土壌Ehの低下が、緩やかな水田条件で生育するため、養水分の吸収はすみやかであるために、チッソ分施の効果が高いことなどから、施肥法としてジアン464（硝化化成抑制剤入り）化成肥料を用い、播種15日後、入水前、ほ肥の3回分施肥が着している。しかし良質米、高収量安定とはいかないのが現状である。

直播水稻は移植栽培と比べて、低節位から分けつを開始し、最高分けつ期が早く、しかも茎数も多いので過繁

第1図 各ほ場の概要



茂になりやすい。また最高分けつ期から幼穂形成期までの期間が長くなるので、この時期の稲穂のチッソ濃度が低下し、肥料切れになりやすく、その結果、有効茎歩合が低くなり、1穂の穎花数が減少する原因になると云われている。

一方、元肥施用量が多かったり、早期追肥がおくれたり、量をあやまると過繁茂、倒伏の原因となるばかりでなく、上位四葉を異常に伸ばし、受光態勢を悪くさせる。乾田直播では、この期間を含めた有効分けつ期から幼穂形成期までの期間を、どのようにもっていくか。施肥法の最も重要な点であろう。

移植栽培では、1株苗数は計画通り植えることはできるが、乾田直播では直接、本田に種子をまくことになるから、発芽や苗立本数は、その年の気象その他の条件によって、そううまくいかない。苗立本数の多少は、施肥法その他の条件によって、量や質的な関係が変化し易い。これ等に対応する施肥量、施肥時期を配慮しなければならないというむづかしさも、高収量安定に結びつかない1因であろう。

乾田直播水稻のチッソ施肥法で、もっとも重要な点で

ある、有効分けつ限界期から、幼穂形成までの期間の施肥対策を、また苗立本数の多少による施肥の複雑さの解消を、LPコート入り複合肥料で同時に解決できるということが、展示ほの成績からも実証された。また本展示ほの担当農家大橋さんは、6haの水田を1人で経営しているが、経営面積が広い上、家族労働のない大橋さんにとっては、4回分施肥は、いかに効果の高い施肥法であっても容易なことではなく、元肥の施肥は機械化しているが許容範囲のせまいほ肥の施用ともなれば、適期施肥は困難である。施肥回数を減らす方法については関心が高い。早速、本年度の稲作に用いたいと今から張切っている。このように、施肥の省力化を図りたいと願うのは、大橋さん1人ではないだろう。

分施肥技術の複雑さを解消すると同時に、施肥回数を減らし、営農技術の改善に、LPコート複合肥料は大いに役立つことであろう。この特色ある肥効、つまり異なる肥効タイプの組合せで、追肥やほ肥に活用できる便利なものでもある。

この展示ほ担当農家、調査にご協力戴いた西大寺農協営農課の先生方に、御礼を申し上げます。

第2表 植物体解体調査(5株平均)

圃場別		各節位別稈長の比較											1980			
		上		中			下			6	1-5計	1-2計	3-5計	比		下半対比
		1	2	3	4	5	上	下								
1. 大橋氏	①	36.4	23.5	17.1	11.3	4.7	0.9	93.0	59.9	33.1	64.4%	35.6%	180.9%			
	②	35.3	22.5	15.4	8.2	3.9	0.9	85.3	57.8	27.5	67.8	32.2	210.6			
2. 串田氏	①	35	22.4	16	10.9	4.5	1.0	88.8	57.4	31.4	64.6	35.4	182.5			
	②	36.7	23.1	15.2	8.3	3.4	0.7	86.7	59.8	26.9	69.0	31.0	222.6			
3. 岡本氏 1)	①	38.4	21.9	13.1	8.6	2.6	0.9	84.6	60.3	24.3	71.3	28.7	248.4			
	②	33.7	21.1	15.1	10.9	3.9	1.0	84.7	54.8	29.8	64.7	35.3	183.3			
4. 岡本氏 2)	①	38.5	23.6	15.2	10.7	2.9	0.8	90.9	62.1	28.8	68.3	31.7	215.5			
	②	40.1	23.9	17.4	8.7	4.9	0.8	95.0	64.0	31.0	67.4	32.6	206.7			

圃場別		1ほ取量構成要素の比較															
		総穂数	穂数	完全穂数	穂実歩合	枝穂数		一次枝穂			二次枝穂			穂実歩合	一次	二次	
						一次	二次	穂数	穂重	完全穂	穂実歩合	穂数	穂重				完全穂
1. 大橋氏	①	109.8	6.0	102.8	95.0%	9.3	17.4	56.1	0.6	55.5	99.0%	52.4	5.4	47.0	90.0%	31.0g	30.0g
	②	99.2	6.5	92.4	93.0	8.4	14.6	53.3	1.9	51.4	96.0	45.9	4.9	41.0	89.0	30.0	28.0
2. 串田氏	①	93.4	7.1	86.3	92.0	8.9	14.7	53.3	1.0	52.3	98.0	40.1	6.1	34.0	85.0	30.0	29.0
	②	110.0	14.9	95.1	86.0	9.7	18.9	57.3	2.3	55.0	96.0	52.7	12.6	44.1	76.0	30.0	29.0
3. 岡本氏 1)	①	107.1	10.7	96.4	90.0	9.0	16.5	54.5	1.5	53.0	97.0	52.6	9.2	43.4	83.0	31.0	28.0
	②	108.3	12.5	95.4	88.0	9.9	17.8	56.0	4.5	51.5	92.0	52.3	8.3	44.0	84.0	30.0	29.0
4. 岡本氏 2)	①	96.6	12.3	84.3	87.0	8.3	15.7	49.6	1.5	48.1	97.0	47.0	10.8	36.2	77.0	31.0	30.0
	②	129.5	11.5	117.7	90.9	9.6	22.1	57.1	0.6	56.5	99.0	72.4	11.2	61.2	84.5	32.0	31.0

冷害, 農業経済に

大きく影響

—55年度農業観測修正見通し—

農林水産大臣官房調査課

高橋善一

農林水産省は昨年12月に、昭和55年度農業観測修正見通しを公表した。以下は、この概要を中心に、その後の経過をとりまとめたものである。

1. 農業生産

55年度の農業生産は、耕種および繭の生産が、天候不順の影響によりかなりの程度減少するのに加え、畜産生産が更に増勢鈍化して、わずかな増加にとどまるものとみられることから、全体では、前年度に比べ6%程度減少するものと見通される。なお、米を除く農業生産は、前年度並みと見込まれる。

(耕種生産)

米は転作等実施面積の増加、天候不順による作柄の著しい低下から、前年度に比べ18.5%の減少となった。その他、主要作物では、麦、てんさい、茶などが増加したほか、前年不作であったりんご、秋冬野菜の増加が見込まれるが、裏年にあたるみかんが大幅に減少するとみられるのをはじめ、他の作物も、総じて不順な天候の影響を受けて減少したことから、耕種生産総合では、前年度に比べ10%程度減少すると見込まれる。

なお、7月中旬以降の低温、日照不足等の天候不順は気象状況に左右される耕種生産に重大な影響を与えた。水稲の作柄は全国的に低下し、全国平均で作況指数87の「著しい不良」となり、また、野菜、果樹等にも被害が発生した。この冷害による農作物の被害見込金額は約6,919億円にのぼり、北海道、東北でその61%を占めている。

(畜産生産)

牛肉生産は引き続きわずかな減少、豚肉も前年度の伸びを大きく下回るわずかな増加にとどまると見込まれ、また、ブロイラーはわずかないし、やや増加、牛乳はほぼ前年度並み、鶏卵もわずかな増加とみられ、総じて引き続き伸び率が鈍化し、畜産生産総合では前年度に比べわずかな増加にとどまるものと見込まれる。

2. 農産物価格

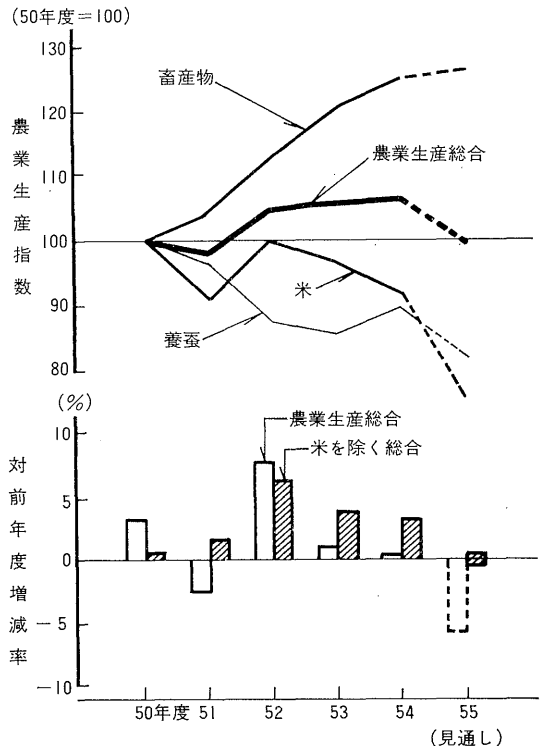
55年度に入ってから農産物価格は、4～6月期に前年同期比1.8%上昇のあと、7～9月期には、同4.8%の上昇となり、上期を通じては同3.3%の上昇と、小幅な上昇にとどまった。下期についてみると、以下のとおりである。

(畜産物)

牛肉は前年同期を下回り、豚肉、ブロイラーは上回って推移し、生乳、鶏卵はほぼ前年同期並みとなり、全体では、前年同期をやや上回るとみられる。

(果実・野菜)

農業生産の動向



昭和55年度農業観測修正見通し総括表

果実について、みかんは大幅に、前年を下回るとみられるが、りんごはかなり大きく下回るとみられる。

	対前年度増減(△)率(%)		55年度見通し(前年度対比)	
	53年度	54	当 初	修 正
実質飲食費支出	2.5	2.5~3程度	2.5~3%程度の増加	2%程度の増加
農 業 生 産	1.1	0.2	ほぼ前年度並み	6%程度の減少
農 産 物 価 格	4.3	4.1	前年度をわずかに上回る	前年度をやや上回る
農業生産資材価格	△ 2.5	5.8	前年度をかなりの程度上回る	前年度をかなり上回る

野菜は、高値であった前年を大幅に下回ると見通される。

(行政価格)

麦の政府買入価格が平均7.9%引き上げられたほか、大豆の基準価格等も引上げとなったものの、加工原料乳の保証価格は据え置かれ、米の政府買入価格も2.3%の引上げとなるなど、総じて小幅な上昇にとどまった。

以上から、55年度の農産物生産者価格は、耕種生産がかなりの程度減少するとみられるものの、総じてみれば需給はなお緩和基調にあること等を反映して、前年度に比べ、やや上昇にとどまるものと見通される。

3. 農業資材価格

54年度の農業生産資材価格は、原油価格の上昇、円安、一般卸売物価の上昇等の影響から、年度中における上昇は、かなり大きなものとなった。55年度に入ってから卸売物価が落ち着いて推移していること等から、前年同期比で、4~6月期14.6%高(前期比3.6%高)、7~9月期12.2%高(同1.6%高)と、次第に騰勢は鈍化しているものの、上期を通じては前年同期比13.4%高となった。この間、7月に肥料は15.4%、農業機械は平均4.5%それぞれ値上げされた。

下期については、①飼料は、海外飼料穀物価格が上昇したことから、配合飼料が56年1月から12.8%値上げされたこと、②肥料は、おおむね上期後半の水準で推移するとみられること、③農業機械は、安定的に推移するとみられること、④農業は、基礎化学薬品価格の上昇等から、12月に5.2%値上げされたこと。⑤その他の資材は安定的に推移するとみられること等からみて、全体としては上期に比べ、騰勢は弱まるものと見通される。

以上から、55年度を通じては、54年度中における上昇が、かなり大きなものであったため、前年度をかなり上回ることとなる。

4. 農家経済

農家経済について、55年度上期の収支としてみれば、農業所得が農業経営費の増加などにより、前年同期を下回って推移し、農外所得がほぼ前年度並みの伸びとなったことなどから、農家総所得では、前年同期比3.5%の増加にとどまった。

年度間を通じては、農業経営費がかなりの程度の増当と見込まれる半面、農業粗収益は、冷害の影響による耕種生産の減少などから伸びが期待できないものと見込まれ、全国1戸当たり平均でみた農業所得は、前年度をかなり下回るものと見通されるが、農業共済金が支払われること等を考慮してみれば、前年度をやや下回るものと見込まれる。

農外所得については、農業所得の減少を、農外就業で補おうとする農家の対応が、今後強まるとみられることなどからみて、年度間では、前年度の伸びを上回るものとなる。

農家総所得ではほぼ前年度並みの伸びと見込まれる。

5. その後の経過

農業生産については、秋冬野菜は、大幅に減少した前年を上回っているものの、寒波等の影響がみられた。畜産生産は、牛肉が枝肉重量の増加から、前年を上回って推移し、肉豚は下期に入り減少に転じた。

農産物価格については、秋冬野菜は、高騰した前年を下回って推移しているものの、寒波等の影響から、価格水準は高いものとなっている。

農家経済については、農外所得は下期に入っても伸びをやや高めている。特に、農業所得の減少が大きい北海道、東北、九州はその傾向が強い。

あとかぎ 今年、これまでとは打って違って冬の将軍の威力は、なかなかすばらしいものがあり、降雪量も去る38年以降の記録だそうです。しかし、さすがに立春を過ぎると争えないもので、その頃の日差しは、すっかり春の訪れを感じさせます。が、頑強な冬将軍が退却する頃になると、今度は雪解けによる水害の頻発が心配になります。皆様のご活躍をお祈り致します。

3月号をお送り致します。予定していたものが入らず、編集子はいささか面はゆい感じを禁じ得ませんが、この点は平素のご好誼にあまえ、よろしくお願い致します。(K生)

りんご栽培技術の現状と普及見込み

農林水産省果樹花き課が昭和54年実施した基本調査にもとづく、全国りんご栽培県における「りんご栽培技術の現状と普及の見込み」は下記の通りである。

りんご栽培技術の現状と普及見込み (昭和55. 4. 5)

県	年	総面積			矮化栽培		無袋栽培		人工授粉		薬剤摘果	
		①	面積②	②/①	面積③	③/①	面積④	④/①	面積⑤	⑤/①		
		ha	ha	%								
青森	52	23,600	599	2.5	4,127	17.5	17,262	73.0	1,180	5.0		
	60	24,500	3,100	12.7	16,660	68.0	19,600	80.0	2,450	10.0		
	65	25,000	5,200	20.8	18,750	75.0	22,500	90.0	5,000	20.0		
岩手	52	3,060	518	16.9	2,754	90.0	1,366	44.6	499	16.3		
	60	4,685	2,547	54.4	4,263	91.0	2,570	54.8	1,170	25.0		
	65	7,674	5,472	71.3	7,060	92.0	4,580	64.8	2,140	28.0		
宮城	52	808	13	1.6	590	73.0	138	17.1	70	8.7		
	60	1,050	235	22.4	900	85.7	500	47.6	200	19.0		
	65	1,300	445	34.2	1,200	92.3	780	60.0	350	26.9		
秋田	52	3,140	178	6	1,316	42	800	25	450	14		
	60	3,640	588	16	2,303	63	1,700	47	935	26		
	65	4,000	1,200	30	3,278	82	2,256	56	1,273	32		
山形	52	3,510	55	1.6	2,460	70.1	100	2.8	—	—		
	60	4,250	300	7.1	3,830	90.1	150	3.5	—	—		
	65	4,600	600	13.0	4,370	95.0	250	5.4	—	—		
福島	52	(37,268) 3,160	(1,395) 32	(3.7) 1	(13,077) 1,830	(35) 58	(20,979) 1,313	(56) 42	(2,199) 0	(6) 0		
	60	(41,925) 3,800	(7,240) 470	(17.2) 12	(30,356) 2,400	(72) 63	(26,580) 2,060	(63) 54	(4,828) 73	(12) 2		
	65	(46,574) 4,000	(13,832) 915	(29.6) 32	(37,508) 2,850	(81) 71	(32,936) 2,570	(71) 64	(8,993) 230	(19) 6		
長野	52	9,470	507	5.4	4,612	49	4,393	46	—	—		
	60	10,600	2,500	23.5	6,000	57	6,350	60	—	—		
	65	11,400	3,500	30.7	8,000	70	7,720	68	—	—		
北海道	52	2,710	106	4	2,360	87	1,436	53	34	1		
	60	2,800	408	15	2,460	88	1,540	55	84	3		
	65	3,100	620	20	2,790	90	1,860	60	155	5		
全国	52	50,082	2,021	4	20,215	40	26,992	54	2,233	4		
	60	56,370	10,327	18	39,171	69	34,754	62	4,990	9		
	65	62,364	18,271	29	48,854	78	42,850	69	9,286	15		

(注) ① 農林省統計、全国計は50,700 ha である。

② 薬剤摘果は52年91ha、60年649ha、65年1,419ha である。

③ 昭和54年調査である。

カッコ内数字は東北計